

LIBRA SQUARE

Book 最近, おもしろかった本

『インディヴィジュアル・プロジェクト』

阿部和重 著 新潮文庫 380円(税込)

スリリングなストーリー展開に 隠された仕掛け, 得体の知れぬ既視感

2004年の芥川賞作家である阿部和重, 1997年の作品。

カバーの写真につられて買った読者も多いであろうが, 中身も十分にスリリングである。

映画学校出身の主人公オヌマが, 故郷の山形でマサキというよそ者の変人が主宰していた「高踏塾」という私塾を卒業制作のためフィールドワーク的に取材するうち自らその活動に嵌りこんでしまった, その過去についての回想と, 現在進行形で生起する出来事の記録とを, 日記の形で綴っていく…それがこの作品の形式であるが, 最後の最後で, 実はこの形式そのものがストーリーの一部であったことが明らかにされ, これにより, 読者は決定不能性のただ中に置かれることになる。

小説家となった段階で, すでに80年代の「ニューアカ(←死語)」的教養で武装していたという, そんな阿部らしい仕掛けではある。

もう一つ特筆すべきは文章から喚起される得体の知れない既視感とでも云うべきものであろうか。これは, 元・諜報機関の工作員だといった怪しげな経歴を喧伝し, 地元の若い衆

(現在で云うニート?) を集めて心身を鍛錬させると同時に自らの誇大妄想を彼らに吹き込む高踏塾塾長マサキの人物像と, とある私の古い知り合いのそれとがほぼ完全に重なり合うという, まるっきり私的な体験に起因するところもあろうが, かつてはオヌマ同様に映画監督を目指して映画学校を卒業した阿部の文体が, 極めて映像的に構成されていることによるところが大である。誰もが知る大事件がこの作品の題材にされているであろうことは, さほどの意味を持たないのではないか。

日常と非日常, あるいは, 現実と非現実とが激しく交錯していく中で, いつしかその区別が無効化されるに至るストーリー展開は, 現代の日本に相応しくありつつも, 「J文学」などといった口当たりの良い分類には収まりきらないダイナミズムを内包している。

近年文庫化された大作「シンセミア」と並んで, 推薦する次第である。

(会員 古宮 憲一郎)



Cinema 心に残る映画

『ジョゼと虎と魚たち』

2003年／日本／犬童一心監督作品

おとぎ話のようで日常的な世界 切なく苦い恋愛の記憶

「明け方にボロボロの乳母車を押して歩く老婆がいるらしい。」男の子は、バイト先の麻雀屋で、客からそんな噂を耳にする。

夜明け前、男の子がいつものように店のマスターの愛犬を散歩させていると、坂道を乳母車が猛スピードで下ってきて、ガードレールに衝突する。男の子が恐る恐る中を覗き込むと、女の子が毛布にくるまって怯えていて、次の瞬間、男の子に包丁で切りかかる。女の子は生まれつき脚が不自由で、昼間は家にこもっているのだが、人気のない夜明け前に、祖母に乳母車で散歩に連れ出してもらっていたのだった。男の子は、老婆と女の子が暮らす家に出入りするようになり、女の子の不思議な雰囲気になんげと興味を抱き、惹かれていく……。

「忘れたい、いとおいしい、忘れられない。」

こんなキャッチコピーが添えられたこの映画は、冒頭、男の子のセンチメンタルな述懐で始まることもあってか、観る者に美しいラブロマンスを期待させる。



『ジョゼと虎と魚たち』(通常版)
価格：4,935円(税込)
発売元：アスミック

登場する人物は皆どこか現実離れしているのだが、彼らを取り巻く風景はとても日常的で、映画の中の世界は不思議なテンションを保ちながら淡々と流れていく。

しかし、映画が終わろうとするとき、これは単なる甘い恋物語ではないということに気づかされる。

誰しも経験したことがある、恋愛の楽しさや喜びとともに、恋愛のリアルな苦さ、切なさ、残酷さが思い出され、胸が詰まる。もしかしたら自分は経験したことなどないのかも知れないが、確かにそれらを「思い出す」という感覚に襲われ、不覚にも込み上げてくるものがある。

音楽もこの映画を忘れられないものとするのに十二分に貢献している。二人が初めてキスする場面で流れるテーマは、この映画の基調を決定付けているし、ラストシーンのあとエンディングテーマが流れ始める瞬間は、この映画で最も美しい時間の一つである。

(会員 小池 良輔)